

フルートと管弦楽のための協奏曲

W.A. モーツァルト

Konzerte für Flöte und Orchester
Wolfgang Amadeus Mozart

◆◆第3回

講師・有田正広

今回はモーツァルトのフルート協奏曲第1番 ト長調の2・3楽章を見てみましょう。

この曲のオーケストラは、第1楽章・第3楽章にオーボエが使われていますが、第2楽章ではそれがフルートに替わります。この当時、オーボエ奏者がフルートに持ち替えて演奏するという習慣があったので、2楽章のフルートはオーボエ奏者が吹いたのでしょう。2楽章でフルートを使うことによって、オーケストラが非常に柔らかい響きになり、しかも、弦楽器には弱音器を着けるように指定があり、夢見心地のような音楽が作られていきます。

き方に注意しましょう。ただし、これはGとEの3度のスラーを繋いでいるのですが、レオポルド・モーツァルトなど、ドイツの理論家たちは“on the beat”でも構わないといっているので、原則にこだわり過ぎる必要はないと思います。ただし、決して32分音符4つのA-G-Fis-Eという均等音符にならないようにしましょう。

② 2小節の4拍目はA/Cis/E/Gという属7のハーモニーですが、③これが3小節の4拍目になるとE/G/Hというe-mollのハーモニーになります。ここでの演奏の仕方は、2小節の3拍から4拍目ではD-E-Fis-GのGは、比較的響きを豊かに醸し出す感じでいいと思いますが、3小節の時にはD-E-Fis-GのGの音に向かって閉じられるような、そしてGの音は大変寂しく響くように心掛けましょう。この部分はオーケストラですが、フルート・ソロのパートも同じで、それは11・12小節目に出きます。

他に注意するところとしては、④23小節の3拍目で、音楽はh-mollのハーモニーで解決しますが、その後の4拍目、フルート・ソロのEisの音は決してはっきりとは演奏しないようにしましょう。口短調の1度のハーモニーから次のハーモニーに移行するときに、このEisの音は非和声音で、しかも当時のフルートではこの音はソフトに響く音です。優しく柔らかく演奏することで、非常に表情豊かな音楽に変わります。

25小節目、ここには修辞法でいう“Syncopatio”（シンコペーション）と“Circulatio”（円弧・迂回）のフィグ

フルート協奏曲 ト長調 KV313

(1778年1~2月?)

〈初版譜 プライツコフ・ウント・ヘルテル版 1803年〉

少し注意が必要なのは、2小節のアフタクトから始まる最初のテーマの2拍目の装飾音です。①最初のAの音、これは“on the beat”ですが、次のFisの音、これはいわゆる3度のスラーですから、原則として“before the beat”で短く演奏し、ビートの置



ールを見ることができます。⑤ 1・2 拍目が Syncopatio、3 拍目が Circulatio です。非常に逡巡するような、迷うような動きですが、ここでは決して歌い過ぎず、音高は高いですが息を使い過ぎないようにしましょう。そして、次のクロマティックの頭から A-Dur のカデンツまで息が続くようにしなければなりません。ただし大変長いフレーズなので、これを一気に吹くのが難しい場合には、26小節の頭のクロマティックが始まる瞬間に、まるで息を取っていないかのように、上手くブレスを取って処理することも出来ます。3 拍目のトリラーの直前でブレスをする演奏はなるべくしないようにしましょう。

前打音の問題として、29小節の3 拍目に付けられている前打音を見てみましょう。⑥ モーツァルトは29小節目では staccato を書きませんでした。⑦ 30小節目では現代譜は staccato になっていますが、初版譜では stroke になっています。29小節と30小節は丁度オクターヴの関係になっていますが、前打音の演奏を変えた方が、むしろ好ましいでしょう。可能性としては、29小節の前打音を16分音符2つと8分音符、30小節目を非常に短く演奏すると理に適っていると思います。同じく前打音ですが、33小節の4 拍目も短めに演奏するといいでしょう。

49小節の2 拍目に“chute”と呼ばれる前打音が出て来ます。⑧ これは“on the beat”で短く演奏されますが、モーツァルトの作品の場合、ここでは Adagio ですので、あまり短くなるとアクセントが付いたように聴こえるので、ほどほどの短さにします。決して長く演奏してはいけません。

Adagio ma non troppo

Flauto I, II
Corno I, II in Re/D
Flauto principale
Violino I
Violino II
Viola
Violoncello e Basso

con sordino
f
p
pizzicato

3

coll'arco

22

coll'arco

4

Flauto Principale

Tutti Solo

6 7 8

coll'arco

Solo

Volti Rondo

第3楽章のテンポはTempo di Menuettoと表記されています。⑨18世紀後半の時代は、バロック時代からのメヌエットのテンポがあまり変化していませんでした。当時の人にとってメヌエットのテンポは自明なものであり、特別なものではありませんでした。ただし、18世紀の終わり頃からメヌエットはテンポが非常に速くなってきました。例えば、モーツァルトの後期の3大交響曲に見られるメヌエットは、こ

この3楽章にも前打音に関して注意点があります。例えば、⑩49小節1拍目の前打音ですが、このGとEの4分音符にstaccato(初版譜ではstroke)が付けられています。このようにstrokeなどに付けられる前打音は短く演奏しなくてはなりません。これを長く演奏している例もありますが、あまり妥当とは言えないでしょう。

⑪73小節の1拍目にあるGに付けられた前打音は不確定前打音で、理論的に言えばA-Gの均等音符が考えられることがあります。当時の習慣からすれば、メロディーを損なうような長さの前打音は避けるべきだということで、比較的短めの前打音がいいでしょう。

107小節から始まるフルートのソロで、⑫108小節1拍目のEにはFisの前打音が書かれ、⑬そして続く110小節1拍目はG-Fisの均等な8分音符になっています。同じような性格を持ったメロディーにこのような別の書き方がされているのですが、これはモーツァルト自身が音楽に変化をつける為に、最初は短い音符にし、次は均等音符でGを倚音として扱っていて、表情豊かに演奏するというように考えていいと思います。

アーティキュレーションについては、モーツァルトが欲したアーティキュレーションは楽譜に書かれている通りですが、この他、パッセージの中にどのようなアーティキュレーションが考えられるかの問題があります。

順次進行のときは比較的ならかなアーティキュレーションで、例えばダブル・タンギングで切るにしても“tu ku, tu ku”とstaccato気味のものより“du gu, du gu”といった柔らかいシラブルを使うといいでしょう。

⑭39小節の3拍目のCis-D-A-FisはCis-DがスラーでA-Fisは切るとか、41小節1拍目のG-E-Cis-Aは跳躍しているのではっきり切るか2つずつのスラーにするとか、その後の2・3拍目E-D-Cis-H / A-G-Fis-Eは慣例に従って初めのE-Dにだけスラーを付けて後

のフルート協奏曲の3楽章より若干速くなってきます。また、ハイドンがロンドンで作曲した交響曲などは、ほとんどScherzoのテンポで、作曲者がAllegrettoまたはAllegroという表示をしている場合もあります。このフルート協奏曲の場合は、伝統的なメヌエットのテンポなので、4分音符がメトロノームで120~126ぐらいで、これでも十分に速いテンポです。あまり過剰な速さにならないようにしましょう。

は切る、または何も付けずに“du gu du gu / du gu du gu”という感じで演奏するなど、様々な方法が考えられます。⑮ 59小節目に見られる跳躍するパッセージは16分音符のアルペジオですから、全部切ってハーモニーの変化を表すこともできるし、2つずつスラーを付けて演奏することも可能です。

⑯ 164小節目のインガンク (Eingang) は、ワン・プレスで演奏できるように、あまり複雑なものには必要ありません。スケールとアルペジオが非常に短い時間で演奏されるといいでしょう。

即興演奏について、この楽章にもゼクエンツァはあちこちに見られますが、その中で即興演奏が可能なものは、140小節目からのゼクエンツァが挙げられます。⑰ これはオーケストラに対してフルートが非常に主張の強いオブリガートで書かれていますが、その後⑱ 144小節目、⑲ 148小節目と2回出てきます。ここでは1回目は何もせず楽譜通りに、2回目、3回目にはそれぞれ異なった装飾を入れるのも可能です。参考までに140小節目からのゼクエンツァに付ける装飾の例を2つ示します。

原曲

装飾例1

装飾例2

もちろんこの通りに演奏する必要はなく、演奏者自らがその瞬間に湧いた靈感、ファンタジーで付けるものですが、原形がほとんど分からなくなるような装飾は付けないようにしましょう。2番目の例の3拍目の最後にDisが出てきてオーケストラと半音でぶつかりますが、これはごく一瞬の非和声音なので全く問題はありません。このように非常に単純なメロディーが出てきたら、ゼクエンツァのときは少し装飾を加えとか、このような即興をするとか、

あるいは前打音・トリラーなどを加えたりアーティキュレーションを変えることで飾ることもできます。装飾を入れることができる場所はこの他にも、例えば⑳ 185、187小節目のゼクエンツァなどがあります。また、この楽章はロンドになっているのでテーマが何度も出てきますので、そのテーマを飾ることもできますし、モーツァルト自身も㉑ 165小節目からのように変えて演奏させている例もあります。



有田正広 (ありた まさひろ)
昭和音楽大学教授
桐朋学園大学古楽器科講師

今、モーツァルトやバッハを演奏するときに、ほとんどこのような装飾を入れない演奏が多いようですが、これらの装飾はこの時代のごく当たり前の演奏様式でした。バッハやモーツァルトが特別な作曲家だからということで、装飾を入れないということは考えられません。彼らを18世紀に生きた多くの音楽家のひとりとしてとらえれば明白です。いろいろ試してみたいかがでしょうか。